決心 ～乳牛とともに～

京都府立農芸高等学校 農産バイオ科 動物バイオコース　3年　小松 美晴

初めて牛を見たのは、小学校の遠足だった。牛はずっと口を動かしていた。そしてその時、初めて牛に触れた。温かかった。再会は、中学３年生の夏だった。京都府立農芸高校のオープンスクールで、模擬共進会が行われ、きれいな牛が高校生に引かれて優雅に歩いている光景に見惚れた。「牛は食べて寝ている生き物」というイメージから、かけ離れた世界がそこにはあった。そのときから「自分の手で良い牛を育て、牛を引いて歩きたい」という夢を持った。農芸高校入学後、すぐに畜産部に入部した。毎日の作業は、飼料給与、掃除、搾乳などたくさんある。生き物を相手にしているので、もちろん休みはない。しかし、そんな日々は苦ではなく、むしろ幸せな毎日だ。

そんなある日、私はお母さんになった。一頭の子牛の管理を任されたのだ。子牛の名前はファースト。先生は、「子牛の時からしっかり管理をしないといけない。牛は育成がすべて」とおっしゃった。経験の浅い私にできるのか不安だったが、精一杯管理しようと心に決めた。「ご飯は好き嫌いせずにしっかり食べなさい」「人を襲ってはダメ」やっても良いこと、いけないこと、母親として愛情をもって口うるさく言ってきた。お母さんになって半年が過ぎたころ、パルという牛が、突然、起立困難になり、早朝、牛舎に行くと横たわり冷たくなっていた。あと一ヶ月で分娩というタイミングで。パルは体型が優れた牛だったけど、群れの中では餌や水を充分に摂取できない弱い牛で、食べる量も減り、少しずつ元気がなくなっていた。そんなパルのシグナルに気付くことができなくて、死なせてしまった。パルの死は、未然に防げたはず。同じ過ちを繰り返さない為に、何がいけなかったのかを考え、私に出来ること、私にしか出来ないことを全力でやろう。「パルのようなことは二度と起こさない。パルが生きたかった分まで」と胸に刻み込んだ。

想いを込めて育てたファーストを、共進会に出品することになった。一頭の牛に対して、リードマンは一人。私は、絶対にファーストをリードしたいと思い練習を始めた。でも、まっすぐ歩いてはくれないし、顔は上げてくれないし、少しもうまくいかなかった。ファーストの隣に座って考えた。しゃがみこんでいる私を、ファーストはじっと見ていた。私はファーストと見つめ合った。そのとき、ファーストが言いたいことがわかった気がした。そして、ファーストともっともっと通じ合えるように、ファーストとの時間を持つようにした。するとだんだん変化が表れ、気付けばファーストは思い通りに歩いてくれるようになった。私はファーストのリードマンを任され、多数の共進会に一緒に出場し、数々の賞歴を積み上げた。昨年10月には京都府の代表として、全日本ホルスタイン共進会に出場した。酪農王国である北海道で、プロの酪農家と同じ舞台で審査を受けるのだ。今までの共進会とは、会場の広さも違うし何より雰囲気の

違いに飲み込まれた。周りを見渡すと、観客席は満席で立ち見の方もいた。全国のたくさんの人が見ていると思うと、頭の中が真っ白になった。緊張と不安で押しつぶされそうになり、思わずファーストの目を見つめると、今日までのことを思い出した。畜産部の仲間・先生・地域の酪農家さん、そして家族。私とファーストは、多くの人に支えてもらい、みんなに応援してもらっていることや、京都府代表だということを思い出した。真っ白だった頭の中が、『絶対に上位入賞する！』という強い気持ちに変わった。17歳の私の鼓動はファーストにも伝わっている。ファーストが最も優れている『バランスと雄大さ』を審査員に評価してもらうために、ファーストが綺麗に見える足や首の位置、立ち方に、細心の注意を払った。結果は全国3位。都府県出品牛の中ではトップという、京都府初の成績を収めることができた。審査終了後、多くの人に祝福の言葉をいただき、写真を撮ってもらっているとき、ファーストがふと見せた自慢そうな顔は、私の一生の宝だ。今思い出しても、本当に頼もしい顔だった。娘のような存在だったファーストが、いつの間にか最高のパートナーになっていた。ファーストは、「自分の手で良い牛を育て、共進会でリードしたい」という夢を叶えてくれた。しかし、私の夢はそれだけでは終わらない。次の夢は、自分で牧場を経営することだ。

ファーストのお母さん牛、ロイター・アスは、昨年8月の牛群検定で、農業高校で飼育されている牛としては初めて、生涯乳量10万kgを越えた。ロイター・アスは11歳になった今も、毎日搾乳をして記録を伸ばし続けている。最近の乳用牛の供用期間は短く、平均的な生涯乳量は3万3千kg程度。ロイター・アスのように、長年の間、高乳量が維持できるのには理由があって、生まれ持った能力や体型も重要なファクターであるけれども、最も大切なのは徹底した管理を行うこと。乳牛の長命連産、高乳量は緻密な管理の上に成り立っていて、農芸高校ではすべての乳牛において、繁殖・飼養・衛生の管理を徹底している。その管理技術があるから、つなぎ牛舎で16頭分の搾乳スペースしかないのに、生乳だけで粗収益2千2百万円。その上、体細胞数10万以下と、きれいで安心・安全な牛乳。農芸高校の牛群は、私の目標でありモデルなのである。近年、酪農は大規模化が進んで、メガファームやギガファームと呼ばれる牧場もある。搾乳ロボットや哺乳ロボット、餌よせロボットなども導入されていたりする。一見、酪農がどんどん発展しているようだが、その裏では、乳用牛の供用期間の短縮や一頭あたりの乳量の伸び悩み、受胎率の低下などの問題が起きていたりする。大規模化・機械化に伴い、個体管理から群管理となって、一頭一頭に気を配ることが難しくなっているからかもしれない。だからこそ、私の目指す牧場は少頭数にこだわりたい。一頭一頭、きめ細かい管理をしたい。牛が表情やしぐさから発しているシグナルを、二度と見逃すことがないように。家畜はペットではないと理解しているけど、毎日一緒に過ごしていると、たまらなく愛おしい。母牛が命がけで産んだ子牛は、大切に責任を持って育てなければならない。家畜の一生は人間ほど長くはないから、その一生の中で少しでも多く、牛が幸せを感じて

過ごせるような牛舎を私は作りたい。牛群改良の大切さ、一頭の経済価値、そして消費者の立場に立った牛乳生産を行うことを忘れずに。

10年後。京都のある場所に、20頭の搾乳牛が並ぶつなぎ牛舎が建っている。この中には、ファーストの娘牛もいる。平均乳量1万2千kgの高能力牛群で、長命・連産性に富み、みんなのんびりと反芻をしている。この牛群を管理し、安心・安全な牛乳を生産しているのは、もちろん私。次の年には、小松牧場内にカフェをオープンする予定だ。

私は、酪農に関わることによって、多くのことを学び、感じることができた。楽しいこともあるけど、辛いこともたくさんある。ファースト、パル、ロイター・アスだけでなく、たくさんの牛と出会い、たくさんの別れを経験した。そのすべての牛が、私にたくさんのことを教えてくれた。一頭一頭との思い出を胸に、一流の牛飼いになることを心に決めた。